時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり

時事新報には毎號詳細なる商況物價

時事新報

第三千百六十七號
明治廿四年十月廿三日（金曜日）
舊曆辛卯九月廿一日（壬午）
日出午前五時五十五分
日入午後四時五十五分
月出午前九時三十二分
月入午前十一時五十四分
滿潮午前八時四十九分
滿潮午後九時十二分
（西曆一千八百九十一年）

秋季演習報道特派員

今般東海道藤澤附近の地方に於て近衞諸兵秋季演習の催ありし天皇陛下にも天覽として御發輦あらせらるゝ筈に付本社は特に社員を同地に派出して其實況を詳細に報道すべし

時事新報定價

時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細の商況物價報告あり其代價遞送料廣告料は左の如し

一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓〇月曜日休刊

〇時事新報社ヨリ直接ニ郵送スルモノハ右定價ノ外ニ一箇月十三錢ノ遞送料ヲ申受ク

時事新報廣告料（前金）

一行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を塡塞するより各社同一の記事を掲ぐること寡からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も寡からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報

軍艦の遭難

軍艦は國有物にして語を換へて云へば全國納税者の金を以て製造したるものなれば其取扱の局に當る者は百事鄭重を旨とす可きこと勿論にして若し萬一にも怠慢の形跡あるときは其責任は免れざることゝ知る可し即ち先進國の海軍に於ては艦長其人の撰任を重んずる所以なれども海洋の廣き風波の險なる時としては航海上に不慮の變なきを得ず或は乘揚、沈沒、衝突等の出來事もあるが故に斯る場合には直に軍法會議を起し其艦長以下關係の重なる士官を審議し有罪のものは無論假令ひ止むを得ざるに出でたるものと判決して無罪に決するも艦長たるものに限り再び就任の榮を得るは極めて稀れなる慣例なりと云ふ右の法規習慣法の如きも畢竟國有物なる軍艦の取扱を鄭重にするの精神にして注意周到なりと云ふ可し過般我軍艦筑波號が佐渡海に於て遭難の事あり實際の情況は我輩の委しく知らざる所なれども元來八九十の三箇月間は日本海に最も危險多き季節にして世界各國の航海者と雖も皆之れを知らざるものなく英國軍艦の水夫の間に行はるゝ薬唄の中にも日本海には八月九月を戒しむ可し十月を過ぎて始めて安心なりとの意味を示すものさへある程なりと云へば筑波の遭難は去月中旬の事にして恰も此戒を犯したるの嫌なきを得ず（當時英國の東洋艦隊は函館に碇泊して更に動かざりしと云ふ）抑も軍艦の進退運動は唯その筋の上長より命令するがまゝに從て艦長には自動の權限なしとの掟なれば上長の筋より斯る危險の季節に北海の航海を命じたらんには其命令の當らざること勿論なれども我輩は艦長に向ても自から求る所のものなきを得ず聞く所に據れば筑波は隨分老船にして且噸數と馬力と割合も宜しからず順風の時には蒸氣よりも帆を用る方却て速力に利益ありと云ふ程の次第にして斯る船を以て此季節に日本海を航するは固より安全の策に非ず多年航海の經驗に示す所なれば假令ひ上長の命令あるも其命令に從ひながら自から實地臨時の注意なかる可らず若しも今度の遭難事件が此邊の注意を缺きたるが爲めに生じたるものならんには輕視す可き事柄に非ざるなり然りと雖も我輩は事の顛末を詳に知らざるが故に其罪の何れに歸す可きを斷ずるにあらざれども兎に角此季節に此船を以て此海上を渡航したるは航海法に於て當を得たるものに非ずと云へば我輩は我海軍の爲めに聊か遺憾を覺ゆるものなり

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇支那政府既に製鐵場設置の計畫あり〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

製鐵場設置の計畫は愈々其歩を進めて調査も運び費額も定まりて次期の議會に提出す可しと云ふ我輩は敢て其議に反對する者に非ざれども曾て前號にも述べたる如く製鐵の事業たる大仕掛のものにして容易の業に非ず我國の現狀に於ては原料の產出と云ひ職工の熟練と云ひ其他經濟上一般の事情と云ひ斯る大事業を起して果して得失相償ふの見込ある可きや否や頗る疑はしき所なれども若しも軍事上等の必要よりして是非とも事業を起さんとならば伊太利もしくは西班牙等の例に倣ひ外國の製鐵會社と特約を結び其會社をして內地に業を起さしめ他日一般の事情自から起業するに適當なる時に至りて之を買取ることゝもなさば目下に得失相償はざるの患を免れて却て後來の利益も少なからざる可しとの旨を述べたりしが我輩の所論果して孤ならず近日左の如き報道に接したり

佛國兵事新誌の記載に據れば支那の李鴻章總督は開平（天津と鐵道線路の相通ずる處）炭坑の近傍に大砲、諸機械、軌條等の諸製造所を含有する一大製鐵場を設置する爲め獨逸のクルップ會社と商議中なり其約束は製造一切の費用をば若干年間會社にて負擔し期限に至りて支那政府の手に歸する其代りに原料を供する事に就ては會社に或る特典を與ふる等なりと云ふ

右の報道にして果して事實に相違なければ李總督の慧眼、支那の獨力を以て製鐵の如き大事業を輕卒に企るの非なるを洞見し彼の伊太利西班牙等の例に倣ひ外國の會社と約束して漸進を謀るの計畫なる可し支那今日の事情に於ては誠に適當の考案なりと云はざるを得ず我國の製鐵事業も完全の計畫こそ望ましけれども最初より其完全を望む可らずとすれば事情の許す限りに於て最良の方法を撰み一日も早く着手すること今日の急なる可し調査と云ひ取調と云ひ單に坐上の計畫のみにして實際の事情如何を問はざるときは議會の同意も覺束なきのみならず或は他に一着を先せらるゝも知る可らず我輩の竊に取らざる所なり

官報

〇正誤　昨二十一日勅令第二百一號中第二種帽の圖下部の複線は單線の孰も誤

〇遞信省告示第二百三十六號

來十一月一日ヨリ常陸國河內郡龍ケ崎郵便局ヲ郵便電信局ニ改定シ龍ケ崎郵便電信局ト稱シ其事務ヲ取扱ハシム

明治二十四年十月二十二日　遞信大臣伯爵後藤象二郞

〇遞信省告示第二百三十七號

千八百七十八年十月一日以降獨逸帝國政府ノ保護ニ屬スル東阿非利加領ハ萬國郵便爲替約定ニ加入セリ

明治二十四年十月二十二日　遞信大臣伯爵後藤象二郞

雜報

笑話

傍若無人の老婆を打拂ふ（外國笑話意譯）

或る日余は所用の爲め蒸氣車に乘り込みて地方へ行く其沿道、或るステーションにて一人の老婆入り來り偶々余が左の脇に席の空たるを見て之にドッカと尻を据へたり、見れば至て結構らしき老婆にて後生願ひとは手に掛けたる珠數にて夫れと知られたり又手荷物は隨分盛んなるものにして脊中に四角なる風呂敷包み一ッを胸にて結び止め、首より頭陀囊二ッを前にさげ、兩手に紙包み二ッづゝ絲にて結びて引提たり但し左の方なる包みの一ッは油紙なり老婆は流石にチクと居心の惡しくやありけんモヂリ〳〵と五體を動かし彼のガサ〳〵したる油紙の包みにて余が損料借の絹布の着物を散々に押し摩りければ余は氣の引けること一通ならず、ゴリりと云ふ度にビクリとする其折柄老婆は何分にも究屈なりしこと見え終に又立ち上りて先づ兩手の紙包みを足の前に二ッ積み重ね頭陀囊は首より外して膝の上に並べたり先づこれまでは無難なりしが老婆は尚ほも進で胸なる風呂敷の結び目に手を掛けたるにぞハテナ彼の風呂敷包みの落ち着く先きは何處やらん熟々最前よりの禮儀作法を觀ずるに或は境杭の代りとして彼我の間に押込まるゝにやあらん、見れば隨分大なる包みなり左あらばだに彌上にも肥へ太りたる老婆が肉の苦しく〳〵と心竊かに思ひ苦せしが南無三寶彼の風呂敷包みは余が膝の上に落ち來りたり又其包みの見掛に由らず輕きは怪む可しと思ひしが兎に角に余は事の案外なるに且つ驚き且つあきれ老婆が早速の即案に人の膝を利用せし取廻しの程に感服したり老婆は余が身の苦樂に少しも頓着せぞ指を屈して

エート木工兵衞さんの子供にヤンツバガ一包み、お皿の子に栗が三升と、夫れから寶丹に生姜に蟲の藥に風邪藥エーと八兵衞さんに頼まれた行燈もあるしと、芋助さんが注文した味噌漉と土鍋と丼もあるし〳〵よし〳〵と獨り頷りに點頭き居りしが終に余が方を振り向き眼鏡の中より余の顏を熟々見て

モシ〳〵主やハア新田の田子兵衞どんじや御在ませんか

と問ひけるにぞ余は然らずと答へしが老婆は尙ほも語を續け

よりや魂消た私やヘアキ
たけが違ッたかチー色の
一體に顏の始末のつかな
さうさナー違てる所は田
く大かアなかッた筈だが
と云ひしかば余は平生鼻
ことなれば少々ムッとし
いゝゑ私ッちの名は田子
加藤淸正と申しますのサ
と切り口上に云ひ放ちけ
加藤へー加藤、夫れじや
んの親類じや御坐らねへ
と云ふにぞ
イヤ全くさうじやありや
に逢たこともありやせん
老婆　へゝーさうかナー
分思ひ當らない遠方にお
余　へー
お獨りかナ
左樣
お宅に子供衆でもお持ち
宅はないのサ私ッちや孤
ヤレ〳〵夫れは可愛さう
モウ年が寄たに由て出ず
サ成て飲みもなさるまい
誰と云て育てゝ呉れた人
の水を横目ににらんで金
だ九ッと云ふ餓鬼の頃、親
ル近處の犬を打ちのめし
らない理屈たア思たが仕
其處で私ッちが思たにや
じやあるめへ、一番、海
云ふものは誰憚らぬ男一
た
へー獵師にでもならッしゃ
何の馬鹿な面な獵子あん
かチ私ッちや青海原を縱
を共にしやしたのサ
へー
アイ其中私ッちも海賊に
を斬り殺したり燒き殺し
知れず其後、三十年の長
ひ血を啜てばかり居たの
だが今じや改心のをなさ
と云ひつゝ老婆は少し身
荷物に手を掛けたり
余　左樣サ今じや蟲も殺
老婆　お說敎を聞きにお
アイ時々には行て見るこ
夫れはマア御奇特な、わ
人に立ち歸らせるので夫
が村の牙次郎と云ふ者は
惡人と云たら如彼惡い奴
奴に一錢五厘盜まれたこ
寺の愚慢聖人のお說敎を
は生れ變た樣な佛者にな
老婆は暫く言葉もなくて
ふて云ひけるは